

病虫害発生予察情報

令和6年8月30日

病虫害発生予察情報（飛騨地域） 9月予報

高温多湿の傾向は今後も続くと予測されています。台風が多発が予想され、一方で秋雨前線による気温低下、湿度の高止まり等、気象変動が大きい月です。

ほ場の衛生管理と適期作業・適期防除に心がけ、病虫害の発生を最小限に抑えましょう。

【水 稲】「たかやまもち」等の早生品種では収穫期を迎えます。収穫が遅い「コシヒカリ」等に、いもち病やウンカ類の防除を実施する場合は、農薬の収穫前日数等の使用基準を確認し、早生品種圃場への飛散防止に努めましょう。

【果 樹】 気温が高いとカメムシ類やシンクイムシ類の発生が長引く可能性があります。発生状況を確認して必要な防除を実施しましょう。

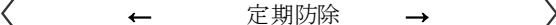
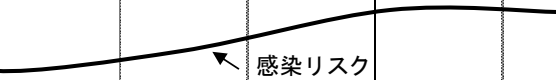
【野菜】気温が低下するとハウレンソウではケナガコナダニやべと病、トマトでは灰色かび病や疫病の発生・急増が懸念されます。予防防除に努めましょう。

今年問題となった病害虫は、来年の防除計画に役立てるため、発生状況と対応を記録しておきましょう!!

○主な病害虫の発生状況及び今後の予測（９月）

防除時期の目安

病害虫名 発生量		発生消長の一例・防除時期の目安									防除上の注意事項等
		9月						10月			
		1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	1半旬	2半旬	3半旬	
水稲	穂いもち	たかやまもち収穫									・籾いもち(籾単位で白化)が多い場合は被害拡大を防ぐため、追加防除を実施する。 ・晩生品種を追加防除する場合は、収穫時期を迎える早生品種圃場への農薬の飛散防止に努める。
	発生量: 並	コシヒカリ収穫									
	ウンカ類	多発時のみ防除									
	発生量: やや少	本田での発生量									
果樹	果樹カメムシ類	↓									・本年のカメムシの発生数は例年に比べ多いので、大量飛来時を逃さず防除する。 ・9月中旬を過ぎると夜温が低くなるため、予察灯にはほとんど誘殺されなくなる。
	発生量: 多	予察灯への誘殺数									
	シンクイムシ類	フェロモントラップへの誘殺数									
	発生量: 多	↑									
	リンゴ斑点落葉病	↓ ↓									
	発生量: 並	感染リスク									
野菜全般	タバコガ類	フェロモントラップへの誘殺数									・フェロモントラップへの誘殺は9月が最も多い。 ・生長点付近等に産卵するため、幼虫は確認しやすい。 ・幼虫を見つけたら若齢期に薬剤防除を行う。 ・防除後に生き残った老熟幼虫は捕殺する。
	発生量: 多	↑ ↑									
	ヨトウムシ	↓ ↓									
	発生量: やや多	フェロモントラップへの誘殺数							↓		
	アブラムシ類	黄色水盤への誘殺数									
	発生量: 並	↑									

病害虫名 発生量		発生消長の一例・防除時期の目安									防除上の注意事項等
		9月						10月			
		1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	1半旬	2半旬	3半旬	
ハウレンソウ	べと病										・発生すると感染スピードが早く、発生後の防除は困難であるので、予防防除に努める。 ・平均気温20℃を下回る9月中旬頃から、低温多湿の条件が重ならないよう管理する。 ・餌となる有機物の多用は避ける。 ・もともと土壌にいるコナダニは湿った条件を好むので、乾燥する圃場では土壌からハウレンソウに移動しやすい。 ・土壌湿度を保つことで被害を軽減している例がある。
	発生量：並										
	コナダニ類										
	発生量：並										
トマト	灰色かび病										・発病した葉、果実は伝染源となるため早めに除去する。 ・保温のためのサイド被覆前に発生抑制を徹底する。 ・サイド被覆後は連続して締め切った状態にせず、乾燥させる時間を設ける。 ・低温・連続降雨の前に予防防除する。 ・台風で泥の跳ねあがりがあると発病リスクが高くなる。 ・20℃飽和湿度条件では6時間で感染する。 ・密閉した状態では急激な蔓延がみられることがある。
	発生量：並										
	疫病										
	発生量：並										

*** トマトキバガ ***

原産地の南米から2006年にスペインに入り、それから爆発的に生息範囲を大陸伝いに東に広げ、2021年には中国に侵入し、日本でも同年に宮崎県で初めてほ場で確認されました。飛騨地域では昨年9月に初めてフェロモントラップへの誘殺が確認され、本年は6月から発生が継続しています（図）。全国の発生状況から、海外から飛来すると考えられています。

本虫は卵から成虫までの期間が約1か月と短く、産卵数は260個と多いため増殖力が強く、このため殺虫剤の抵抗性がつきやすく、海外ではすでに何種類もの農薬で抵抗性が認められています。

県内のほ場での被害は今年5月に岐阜・西濃地区で確認されており、飛騨地域でも8月に4件が確認されました。

本虫はトマト果実に穿孔侵入することから被害は甚大であるとされているため、発生には注意を払い、見つけた場合は直ちに確実に捕殺・防除する必要があります。

● トマトキバガの発生の特徴と対策

- ・海外から継続的に飛来すると推定される。
- ・タバコガ類と異なり4mm ネットでは防げない。このため小さな穿孔が確認された果実や、袋状に食害された葉は確実に処分する（ハウス外に放置するのではなく、密封あるいは埋却して確実に殺す必要がある）。
- ・薬剤抵抗性が発達しやすいので、IRAC 分類で作用機構が異なる農薬により、ローテーション防除する。
- ・積雪地の戸外では越冬はできないと考えられるが、育苗施設等で越冬しないよう注意する。



図 フェロモントラップによるトマトキバガ誘殺数の推移（飛騨市古川町）

東海地方1か月予報（8/31～9/30） 名古屋地方气象台 8月29日発表

- ・向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。
- ・向こう1か月の降水量は、湿った空気の影響を受けやすい時期があるため多いでしょう。

岐阜県病害虫防除所では、この他に病害虫の詳細な調査データをホームページにて公開しています。（トップページQRコード→）

<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/2934.html>

飛騨支所 〒506-8688 高山市上岡本町 7-468

TEL (0577) 33-1111(内線 245) FAX (0577) 34-2706



トップページ